

植物に関連するさまざまな療法とその整理 —とくに園芸療法と植物介在療法をめぐって—

松尾 英輔

東京農業大学農学部バイオセラピー学科 243-0034 厚木市船子 1737

Classification of Plant Related Therapies Based on Human Behavior — Horticultural therapy and plant perceptive therapy in plant assisted therapy —

Eisuke MATSUO

Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture, Funako, Atsugi-shi 243-0034, Japan

Summary

After the introduction of horticultural therapy into Japan in 1990s, Japanese explosive interests in it induced many kinds of understanding about horticultural therapy, resulted in the birth of the new concept "horticultural well-being" which includes horticultural therapy. Another phenomenon induced by Japanese interests was many nominations and confusions in plant related therapy, which brought forth a concept and a naming of "Shokubutsu Kaizai Ryouhou" which means in English "plant assisted therapy (PLAT)". Plant assisted therapy is consisted of two groups "horticultural therapy (HT)" and "plant perceptive therapy (PPET)". The former is a therapy which is based on the behavior of "fostering" plants. The latter is based on the behavior of "acquiring" plants, including "plant acceptive therapy (PACT)" and "plant art therapy (PART)". Plant acceptive therapy exclusively utilizes "hunting" plants such as touching plants with five senses and harvesting plants with hands and feet. Plant art therapy exclusively utilizes "making" activities such as plant arts, foods, paintings, pressed flowers, etc., using plant materials.

Key words : Fostering, acquiring, hunting, making, horticultural therapy, plant assisted therapy, plant perceptive therapy, plant acceptive therapy, plant art therapy, horticultural well-being
創造的行動, 育てる行動, 獵る行動, 狩る行為, 造る行為, 人間性, 癒し, 喜び・愉しみ,
植物介在療法, 園芸療法, 植物感芸療法, 植物受容療法, 植物工芸療法, 園芸福祉

はじめに

日本において、園芸療法が本格的に導入されるようになったのは1990年代初頭である。その後、園芸療法への関心の高まりと啓蒙・普及の結果、園芸療法の解釈が多様になってきた。そのことが園芸療法の関係者に対して、園芸療法とは何か、庭を散歩するのは園芸療法か、押し花は園芸療法ではないのか、植物の手入れをしなければ園芸療法ではないのか、手入れのできない人に植物を見せ、触らせる療法はいったい何といえよいか、など少なからぬ混乱をもたらしていることは否めない。

他方、園芸だけでなく、植物に関係する療法にはさまざまな名前をもったものがある。たとえば、園芸療

法、園芸セラピー、花療法、植物療法（薬草療法）、ハーブ療法、庭療法、ガーデン療法、森林療法などは、よく耳にする名称である。なかでも園芸療法は当学会関係者をもっともよく知っている名称であろう。このように何らかの形で植物に関係するすべての療法をまとめて「植物介在療法」と称しているが、インターネットで検索すると、植物に関係する療法は驚くほど多く存在する（松尾, 2006a）。これらをどのような規準によって整理すればお互いの関係やその特徴がわかりやすいのであろうか。そして、上記のような疑問に答えることができるのだろうか。

本稿では、園芸療法の発展、そしてそれに伴ってどのようにその解釈が拡大されてきたか、さらに、植物に関係する療法にはどんな名称があるか、それらをどのように整理すれば、多様な名称の特徴と相互関係を把握することができるかをまとめておきたい。

2007年2月26日受付。

1. 日本における園芸療法の発展：概念の拡大と療法の多様化

1990年代初めに、園芸療法が本格的に日本に導入されるようになって10数年が経った。この間、その啓蒙・普及、さらにはその発展には目を見張るものがある。本章では園芸療法が導入されてから普及する過程でどのように解釈が変化し、植物に関係する療法にはどんなものがあるかを概観しておきたい。

1) 園芸療法の導入と啓蒙・普及

日本において農・園芸作業が治療やリハビリテーションの場で活用されたのは1930年代で、東京の松澤病院での実践が最初である(野田, 1997)。その後1950年代にも精神科の療法の一つとして取り上げられた(佐々木, 1987)。1960年代に作業療法士制度の導入にあたって農・園芸作業も活動の一つとなっていたが、大きな比重を占めるものではなかった(松尾, 1998b, 2000)。

日本への導入のモデルとなったアメリカにおける治療・リハビリテーションの場での園芸の活用については、塚本(1978)がその著「園芸の時代」のなかで紹介しているが、この時点では「園芸療法」の名前は出てこない。Horticultural Therapy, Horticulture Therapyが「園芸療法」という訳語で最初に紹介されたのは1981年、小出氏の新聞記事のなかだったらしいが、筆者はその新聞を確認していない(松尾, 2000)。1982年には、園芸関係の雑誌にアメリカにおける園芸の治療、リハビリテーションへの活用を紹介した記事で、園芸療法という名前が使われている(京都大学農学部, 1982)。

あらためて園芸療法が注目され、本格的導入が始まったのは、1990年代に入ってからである。たとえば、松尾(1991)、広田(1992)、澤田(1992)、日本緑化センター(1992)らは、園芸治療、ホルトセラピー、園芸療法、ホーティセラピー、ホーティカルチュラル・セラピーなどの名前で、主にアメリカのHorticultural TherapyやHortitherapyの実情を紹介している。

その後、1993年から1994年にかけて、澤田みどり氏、D. Relf博士、さらには第24回国際園芸学会議(京都市)に参加した、外国の園芸療法関係者による日本各地での講演をきっかけに、園芸療法に対する関心は急速に高まってきた(松尾, 1998b, 2000)。

このような園芸療法への関心の高まりを契機に、紹介・啓蒙資料が多数印刷されるようになり、講演会・シンポジウムの開催が増え、研究会・勉強会が各地に結成されるようになった。これらは1990年代後半には爆発的に増加している(松尾, 1998b, 2000)。

この間、澤田みどり氏は1991年から園芸療法の実践を始め(澤田, 1992; 松尾, 1998b, 2000)、その後園芸療法を試行する福祉施設や病院なども増え、1995

年にはその様子を紹介する報告が出版されている(高野, 1995)。

2) 解釈の拡大と療法の多様化

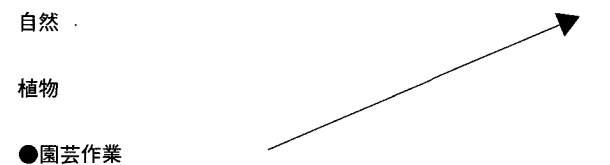
前述した園芸療法に対する関心の高まりは、園芸を含めた植物に関連する療法に二つの特徴的現象を引き起こした。一つは、園芸療法に対する解釈の拡大であり、もう一つは、園芸療法を始めとして、庭療法、ガーデン療法、花療法、アロマセラピーなど植物に関連する療法の多様化である。

(1) 園芸療法の解釈の拡大

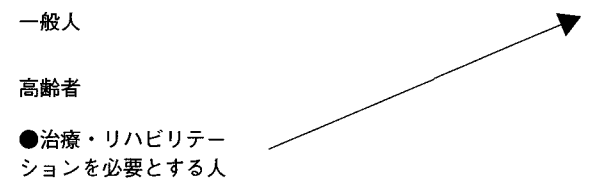
園芸療法への関心が高まり、出版物が増え、講演やシンポジウムが全国津々浦々で開催され、研究会が各地に結成されるようになると、園芸療法の解釈に違いが目立つようになってきた。この違いはさまざまな混乱や問題を生じ、やがて「園芸福祉」という概念の誕生へと発展する。その誕生の経緯ならびに園芸福祉のなかにおける園芸療法の位置づけについては、松尾(1998a,b,c, 2000, 2002a, 2005b,e)が詳述しているので触れない。ここでは、園芸療法のどのような部分に、どのような違いが生まれてきたかについて簡単に述べておきたい。

さまざまな解釈がなされるようになったのは主として次の3点にある。まず「園芸」とは何か、次に療法の「対象者」は誰か、さらに、その対象者をどうしたいかという「ねらい」である。それぞれにいつ

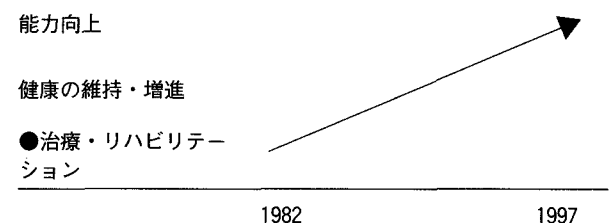
1) 園芸の内容



2) 療法の対象者



3) 療法のねらい



1982

1997

第1図. 関心の高まりに連れて園芸療法の解釈は拡大。松尾(1998)をもとに模式図として示した。

第1表. 植物を介在させるさまざまな療法とそれらのグループ化.

<植物の種類>

草木療法, 草木セラピー, 樹木療法, 花療法, 花セラピー, 花セラピー,
フラワーセラピー, フラワーセラピー, 花レメディ, フラワーレメディ,
草花療法, 草花セラピー, 野菜療法, 野菜セラピー, 果物療法, フルーツセラピー,
薬草療法, 薬草セラピー, 植物療法, 植物セラピー, 植物セラピー, ファイトセラピー,
フィト療法, フィトセラピー, フィトセラピー, プラント療法, プラントセラピー,
プラントセラピー,
香草療法, 香草セラピー, ハーブ療法, ハーブセラピー, ハーブセラピー,
アロマセラピー, アロマセラピー

<療法の場>

野外療法, 野外セラピー, 草原療法, 高原療法, 高原セラピー, 山療法, 山セラピー,
山地療法, 山岳療法, 山岳セラピー, 森林療法, 森林セラピー, 森林セラピー,
森療法, 森セラピー, フォレストセラピー
公園療法, 公園セラピー
庭療法, 庭セラピー, 庭園療法, ガーデン療法, ガーデンセラピー, ガーデンセラピー
菜園療法, 菜園セラピー, 農場療法, 農地療法, ファームセラピー, 農園療法, 田園療法,
田園セラピー, 畑療法, 畑セラピー

<活動・かかわり方>

1) 植物を栽培する場合

園芸療法, 園芸セラピー, 園芸セラピー, ホルトセラピー, ホーティセラピー,
ホーティカルチャーセラピー, ホーティカルチュラル・セラピー
農業療法, 農業セラピー, アグリセラピー, アグリセラピー,
アグリカルチャー療法, 農園療法, 農園セラピー
農作業療法, 農作業セラピー
百姓療法, 百姓セラピー

2) 植物を栽培しない場合

植物工芸療法, 植物受容療法, 植物感受療法

3) 栽培の有無に関係しない場合

植物介在療法

松尾 (2006a) を改変し, 2007年2月20日 google と yahoo 検索で補足した.

ろ, どのような解釈がなされているかについては, 松尾 (1998b, 2000) が詳述している。それを要約すると, 導入後の時間の経過とともに, 上記3点のそれぞれが拡大解釈されるようになり, 園芸療法の定義が不明確になり, 混乱が生じたのである。解釈が拡大する様子を模式化して示したのが第1図である。

このように, 「園芸」, 「対象者」, 「ねらい」のそれぞれにいくつかの解釈が出てくれば, 園芸療法の解釈はそれらを掛け合わせた数だけありうることになる。これでは園芸療法を学ぼうとする人が混乱してくるのも無理からぬことであろう。

(2) 植物に関係する療法の多様さ

園芸療法に対する関心の高さは, その解釈の違いを生むとともに, いっぽうでは植物に関連する療法の違いを言葉で表現することへと発展していった。たとえば, 花を使っているから花療法あるいはフラワーセラピー, 庭で行うから庭療法あるいはガーデン療法, 農業を活用しているから農業療法などがあげられる。

このような植物に関連する療法としてどんな名前があるか。考えうるさまざまな名前を想定し, google と yahoo 検索でヒットするかどうかを調べ, それらをグ

ループ化したのが第1表である。

検索でヒットする件数は1件から1万件を超えるものまでさまざまであるが, 療法の名称は90を超えていた。これらの療法は大きく三つのグループに分けられる (第1表) (松尾, 2006c)。

まず一つは, 媒体とする植物の種類で表現した名称である。ここにはある特徴をもった植物群の名前, たとえば, 花, 野菜, 薬草, ハーブなどで示される療法があげられている。しかしそのほかにも, 植物の種名で示された療法もある。たとえば, こんにやく療法, バラ療法, みかん療法などである。このような事例に倣って名前をつけていけば, 療法の名称は限りなく増えてゆく可能性がある。

二つ目は, 植物とかかわる場所あるいは療法を行う場所で示された名称である。最近よく話題になり, 知られるようになった例は森林療法であろう。また, 同じ園芸作業を療法に取り上げる場合にも, 庭で行うから庭療法 (ガーデン療法), 農園で行うから農園療法という例もある。山から平地, 屋外から屋内まであらゆるところで植物とかかわる機会はあるし, それを療法の場となしうるわけだから, このような場所を名前

とする療法もまた数限りなく増える可能性がある。

三つ目は、植物とのかかわり方を療法の名前のよりどころにしたものである。これらは、植物の世話（栽培）をするか、しないかによって、三つに大別される。第一は、園芸療法に代表されるように、主に植物の栽培というかかわりを療法の媒体とするものである。農園芸療法（セラピー）、農業療法（セラピー）、農作業療法（セラピー）などもそれである。第二は、栽培するわけではなく、生産物としての植物に接する活動や生産物を利用する活動を活用する療法である。植物受容療法と植物工芸療法に示されるように、五感で植物を受け入れる、植物を収穫する、あるいは植物に手を加えて形を変える、違う目的に利用するなど、いずれも栽培しない植物とのかかわりを療法的に活用するものである。第三は、植物介在療法（浅野，2005；松尾，2005a,d, 2006b）のように、栽培する場合も栽培しない場合も含むもので、植物に関係するすべての療法を呑み込む性質をもつ名称である。

このように多彩な名称をもっている植物に関係する（媒体とする）療法を総称してどのように呼べよいのであろうか。この疑問に答えて提唱されたのが「植物介在療法」である（松尾，2005d, 2006b,d）。

3) 植物介在療法の提唱と園芸療法との関係

前述のように、植物介在療法とは、植物に関連するすべての療法を総称したものである。どのような経緯でこの言葉が使われるようになったかを少し詳しく整理しておこう。

日本では園芸療法の導入以来、植物が関係する療法については、解釈の相違（松尾，1998b）や、第1表で示されるように、療法に用いる植物や療法の場の違いなどを反映してさまざまな名称で呼ばれてきた。そのなかで「植物介在療法」が日本で初めて提唱されたのは2001年のことであろう（松尾，2001, 2002a, b）。ただし、この概念はその後すこし変更された。すなわち、初めの定義では、植物を媒体とするすべての療法を「植物療法」と称し、これを次の二つに分類した。植物を育てることを療法の主な媒体とする「園芸療法」と、育てない植物を主な媒体とする「植物介在療法」である（松尾，2005d）。

その後、ヴァイス（1995）の唱える「植物療法」が薬草療法を中心とした狭義の療法に使われてかなり一般化している現状を尊重して、次のように定義の再編を行った。植物に関連するすべての療法を「植物介在療法」とし、植物療法（薬草療法）の上位概念に位置づける（松尾，2001, 2005d, 2006b,d）。同様な見方で、浅野（2005）も「植物介在療法」を使用している。

園芸療法の先進国とみなされてきたアメリカの歴史をみると、植物に関連する療法の名称はとくに1970～80年代に多様化した。しかしながらその後の療法名の推移をみると（松尾，1998b, 2000）、The Na-

tional Council for Therapy and Rehabilitation through Horticulture（略称NCTRH、園芸を通しての治療とリハビリテーションに関する全国協議会；和訳は京都大学農学部，1982）が1987年にThe American Horticultural Therapy Association（略称AHTA、アメリカ園芸療法協会）と名称を変更して以降、Horticultural Therapy（園芸療法）の拡大解釈によって、それらの名称はHorticultural Therapyに取り込まれていったとみることができる。

そのアメリカではAnimal Assisted Therapy（動物介在療法）が盛況で、インターネットで検索される件数も多い（google, yahoo, 2006.12）。しかしながら、これに対比して考えられるPlant Assisted Therapy（植物介在療法）は、インターネット検索でみれば、ほとんど話題に上っていない。実際、2005年のgoogleとyahooの検索でも、Plant Assisted Therapyは単独では検索されず、わずかに1件だけAnimal/Plant Assisted Therapyという形で検索されただけであった（松尾，2005a, 2006b）。2007年2月現在でもPlant Assisted Therapyが単独で検索された資料はなかった（google, yahoo）。

日本では2004年後半、東京農業大学に新しい学科の創設を検討する過程で、植物介在療法という名称が話題となった。すなわち、生物介在療法分野の構成に関連して、「動物介在療法」研究室に対しては「植物介在療法」研究室がわかりやすいのではないかというのである。これに対する植物側の意見の主旨は、「理屈としてはそのほうが明確でわかりやすい。しかし、園芸療法はかなり普及していて知名度が高くなってきたが、植物介在療法の知名度は低い。つまり、植物介在療法に比べて、園芸療法のほうが訴える力は強いので、当面は園芸療法で進めたい。」ということであった。

現時点でも、この植物介在療法は園芸療法ほど認知された名称とはなっていない。しかしながら、園芸療法とは何か、その特徴は何かを追究すればするほど、それ以外の療法との相違が明白となり、名前を変えてその相違を明らかにしなければならなくなる。それは、療法に活用する植物へのアプローチの仕方が、園芸とその他の活動とではいちじるしく異なるからである。

2. 創造的に行動する人間と園芸との関係

では、園芸における植物へのアプローチ、つまり、植物とのかかわり方とはどんなものであり、園芸以外の活動でのかかわり方とどう異なるのであろうか。

前章で触れたように、園芸療法の園芸のなかに、活動だけでなく、植物自体を含むとみなす資料はかなりの多い（AHTA，2005；澤田，1992, 1993, 1995；松尾，1994；日本園芸療法研究会，1995；菅，1996；大阪園芸療法研究会，1996）。しかしながら園芸療法が

普及するに連れて、園芸療法の実践者の間では、植物を媒体とすることは共通であるが、五感で植物に触れることと植物の世話をすることでは、その療法的意味合いがかなり異なるのではないかということが話題になってきた。このことはすでにアメリカにおいても、Passive participation（受動的かかわり）とActive participation（能動的かかわり）という形で論じられていた（Lewis, 1996）。簡単にいえば、植物とのかかわり方とその意味を問い直す必要性が浮かび上がってきたのである。

これらは、園芸の本質とは何か、療法の場においてはそれが対象者の人間性とどのようにかかわるか、という課題と連動するものでもある。ここではまず人間性とは何か、人間らしく生きるとはどういうことかをみたくて、園芸の本質とは何か、その本質は人間性にどのように関係してくるかをまとめてみたい。

1) 人間にみる創造的行動—育てる行動と獵る行動

Matsuo (1992, 1995), 松尾 (1982, 1998a, b, 2000, 2005a) は、「人間は創造的に行動する動物である」という考え方（時実, 1974）から園芸にみる行動の本質をとらえようとした。その概要は次のとおりである。

私たちは、本能的（動物的）欲求と創造的（人間的）欲求をもっている。本能的欲求が満たされないと、不安になったり、いらいらしたりするし、それが満たされると「安心」「安堵」「安らぎ」「落ち着き」などで表現される「癒し」の状態になる。そして、創造的欲求が満たされないときには「不満」「怒り」「焦り」などが生まれ、これが満たされたときには「喜び」「楽しみ」「満足」「自信」などの言葉で表現される状態となる

（松尾 2005c）。すなわち、私たちは、これら二つの欲求が満たされたとき、癒されて安らぎを得るとともに、生きていることを実感し、生きる喜びや楽しみをもつことができる。これがしあわせ感につながり、このしあわせ感が心身ならびに社会の状態をよりよい方向に導き、生活の質を向上させる。

その人間的欲求から出てくる創造的行動には、「手に入れる」という主に個体維持の本能的欲求に起源をもつ「獵る」行動（狩る行為と造る行為に分けられる）と「子どもをそだてる（子育て）」という種属維持の本能的欲求に起源をもつ「育てる」行動とがある。つまり、私たち人間は、育てる行動と獵る行動とをあわせもっていて、より人間らしく生きることができる。私たちの行動という面からみたヒトの進化と日常の行動事例を示したのが第2図である。

ところで、上に述べた育てる行動と獵る行動とはどのように異なるのであろうか。これを示したのが第2表である。要約すると、次のようになる。

育てる行動は、それ自身の遺伝情報に基づいて成長する対象（生きもの）に、長期間、客観的・支援的にかかわる。これに対して獵る行動は、対象（生きものでも非生きものでもよい）に短期間・一時的に、意図的・目的的にかかわる。いいかえると、育てる行動では、主体はかかわる人ではなく、対象である。したがって、かかわる人は対象の成長を支援する立場にあるので、対象が何を求めているかをその様子で判断し、それに必要な対策や処置を求められる。しかも、かかわる期間は長いので、辛抱・我慢が求められる。いっぽう獵る行動では、かかわる人が主体であり、その意思・意図によってものごとを進めることができ

欲 求	行 動 類 型		
本能的 (動物的)	(情報を知覚する)(ものを獲得する)		
	手 に 入 れ る		そだてる (はぐくむ)
ヒトから人間への進化	↓	↓	↓
創造的 (人間的)	獵 る		育てる (育む)
行為	狩る	造る	そだてる
具体例	五感によるかかわり 観賞、買い物、収穫 狩猟、情報入手 スポーツ、娯楽	加工、製作 制作、発想 工夫、作文 思考	子育て 後継者養成 植物栽培 動物飼養

第2図. 欲求と行動類型からみたヒトから人間への進化。
松尾 (2004a) を一部改変。

第2表. 獵る行動と育てる行動の比較.

行動 (行為)	獵る (狩る)	育てる (造る)	
行動の対象	生きもの、非生きもの	非生きもの	生きもの
対象の時間	なし	なし	あり
主体の時間	なし	あり	あり
対象の姿・形	変わらない	変わる	変わる
対象へのかかわり方	主体的・意図的 計画的・目的的	左に同じ	客観的・対象まかせ 支援的・養育的
対象との接触	一時的・比較的短期間	左に同じ	継続的・長期間
目的達成	手っ取り早い	左に同じ	時間がかかる、 忍耐を要する
仕事としての生きものへの かかわり方	断片的・分業的	左に同じ	一体的・総合的

松尾 (1982, 1998b) を一部改変.

る。こういうわけで、育てることはかかわる人が思うようにはならず、効率が悪いのに対して、獵ることはかかわる人が思うように遂行できてしかも効率的である。

2) 園芸の本質は植物を育てること

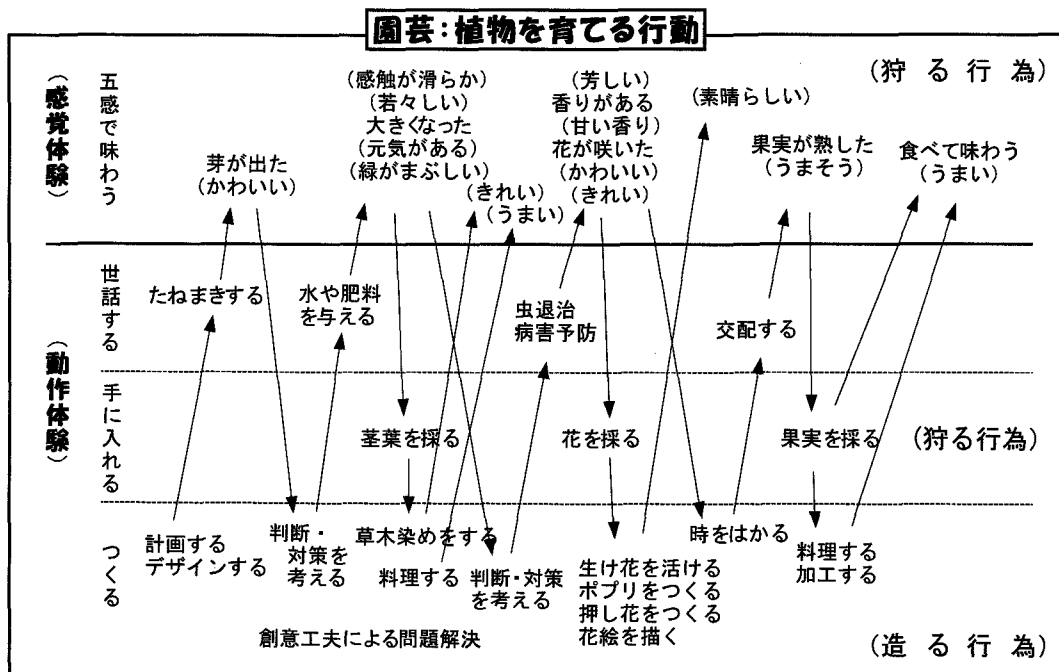
上記のような特徴をもつ育てる行動は、生きものすなわち植物や動物（ヒトを含む）の手入れ・世話をすることによってのみ体験でき、かつ学ぶことができる。いいかえると、植物の栽培すなわち植物の手入れ・世話をしている園芸は、身近な場で日常的に容易に「育てること」を体験し、学べる活動である。

その園芸はどのような活動から成り立っているのだろうか。第3図をごらんいただきたい。

植物の成長に伴ってフィードバックされる動作体験と感覚体験のなかで、植物の状態に応じて「狩る行為」や「造る行為」が統合される。その統合の要素として子育て（そだてる）本能が大きな役割を果たす（松尾, 2005a,c）。つまり、子育て本能は、植物の成長にあわせ、必要に応じて狩る行為と造る行為をつづり合わせる糸の役割を果たして、園芸の本質ともいえるべき「育てる」という行動を編み出している。

3) 園芸では二つの創造的行動を充たした人間らしさを実感

ところが私たちは、その園芸という植物を育てる過程で、五感で植物を味わい、四肢を使って生産物を収



第3図. 植物を育てること。すなわち、園芸とは、植物の生長にあわせて進められる感覚体験と動作体験、あるいは、狩る行為と造る行為との統合化の過程である。松尾 (1998b) を改変。

穫するという狩る行動をも実践している。この過程で本能的欲求を触発・充足して癒しを得るだけでなく、人間にとって欠くことのできない狩る行動と育てる行動とを充足し、さらには発展させ、それだけでより人間らしく生きることを実感できる(松尾, 2005a,c)。だからこそ私たちは、われを忘れて園芸に熱中することができる。植物の手入れに癒し、喜び・愉しみを覚え、育てた植物やそれを用いた活動には、買ったものとは違った格別の思いとより大きな喜びを感じる。

たとえば、青々と元気よく育っている植物を見るとほっとする、世話をした花はいびつでもきれいに見えるし、手入れをしたものには愛着がある、子どもたちが嫌いなニンジンが自分が作ったと食べるようになった、手入れをした野菜はたとえ虫食いでもおいしく食べられる、育てた花を用いた押し花、生け花、ポプリ作りなどの制作には格別の思いがある、などの発言にはこれがかがえる(松尾, 1998b, 2000, 2005a, 2006b)。

このように植物を育てる園芸によって癒され、喜び・愉しみを得られることが、心身の健康だけでなく、生活の質の向上にもつながる。これを積極的に活用して私たちすべての市民のしあわせを増進してゆこうとする考え方が「園芸福祉」である(松尾, 1998a,b, 2000)。そして、療法的なかかわりを要する市民についても園芸を通しての福祉(園芸福祉)を実現しようという活動ならびに分野が園芸療法である。園芸福祉と園芸療法との相違、それにかかわる人たちの具体的活動の相違(療法というかかわり方の特殊性から生まれてくる)については別報(Matsuo, 1999; 松尾, 1998a,b,c, 2002a, 2004b, 2005b,e)にくわしく触れられているので、参照していただきたい。

4) 植物に対する育てるかかわりと育てないかかわり

このような育てる行動と狩る行動は、植物にかかわるという観点からいえば、それぞれ、育てるかかわり、狩るかかわりということが出来る。つまり、園芸は狩るかかわりを内蔵しつつも、育てるかかわりが中心となる活動である。これに対して、栽培を伴わないで、植物を五感で味わうこと、収穫すること、その収穫物に手を加える工芸や料理などのかかわり方からは狩ることしか体験できない。

したがって、植物を取り扱っていても、育てるかかわりの伴わない単独の狩るかかわりを園芸と称するわけにはいかない。実際、狩る行為である花見、公園花壇や山野の花や植物の観賞、農家に出かけて農産物の収穫体験、たとえば、イチゴ狩り、みかん狩り、りんご狩りをして園芸を体験したとはいわない。また、造る行為としての買って来た花を用いた生け花、フラワーアレンジメント、押し花、ポプリ作りなどの植物工芸、あるいは、栽培しない植物を用いた草木染めや料理などを園芸という人はいない。自らの手を入れて

植物の世話をした生産物を狩ったり、これを加工したりするとき初めて、これらの活動は園芸の一環とみなされる(松尾, 1998b, 2000)。

植物の栽培を伴わない単独の狩る行為や造る行為もそれ自身が創造的行動の一つである狩る行動となりうる。それらは育てる行動の要素の一つとはなりうるが、植物の成長に伴ってそれらが統合されない限り、植物を育てる行動、すなわち園芸には発展しない。もちろん、狩る行動でも、それなりの癒し、喜び・愉しみを味わうことはできる。しかしながら、狩る行動だけでは、園芸のように育てることと狩ることの両行動を充足したときに得られる人間らしさ、生きる喜びを実感することはできない(松尾, 2005a,c)。

いずれにしても、療法は何らかの手法を通して対象者がよりしあわせになることを目指して実践されるものである。植物とのかかわりがもたらす不思議パワー(松尾, 2002a)を活用する療法のなかで、園芸療法とは植物を育てるかかわりを活用する療法であるのに対して、育てない植物とのかかわり、つまり、狩るかかわりだけを活用する療法を園芸療法と呼ぶのはふさわしくない。したがって、これには別の名前を与えたほうが理解しやすくなる。

3. 植物介在療法における園芸療法の位置づけ

上に述べてきた植物とのかかわり方という点からみると、植物介在療法(Plant Assisted Therapy, PLAT)とは、かかわり方のいかに問わず、植物との何らかのかかわりを媒体として活用する療法ということになる。つまり、植物に関係するすべての療法を含んだ総称である。したがって、それぞれの療法が植物介在療法の一つであるという見方もできる。そのなかで、育てることを活用する園芸療法に対して、育てない植物を用いた活動を活用する療法にはどのような名前を与えればわかりやすいのであろうか。

1) 植物とのかかわり方と療法の名称

これらを植物とのどんなかかわり方を療法的に活用するかによって分けると次のように区分することができよう(第3表)(松尾, 2005d, 2006b,d)。

まず一つは、植物の世話や手入れ、すなわち育てるかかわりを主に活用する療法で、これまで話題の中心となってきた園芸療法(Horticultural Therapy, HT)がそれである。

いま一つは、育てることがなく、狩るかかわりだけを療法的に活用する「植物感芸療法」(Plant Perceptive Therapy, PPET)である。この療法では五感を使って植物を感知することが多く、また、植物を用いて工芸制作を行う例が多いところから、その特徴である「感」と「芸」をとって名づけられた。この植物感芸療法は、狩ることを媒体とする「植物受容療法」

第3表. 植物とのかかわりに基づく植物介在療法 (Plant Assisted Therapy, PLAT) の分類と呼称.

行動類型	(行為)	呼称	英語の呼称	略称
育てる		園芸療法	Horticultural Therapy	HT
猟る		植物感芸療法	Plant Perceptive Therapy	PPET
	(狩る)	植物受容療法	Plant Acceptive Therapy	PACT
	(造る)	植物工芸療法	Plant Art Therapy	PART

松尾 (2005d, 2006b, d) による.

(Plant Acceptive Therapy, PACT) と、造ることを媒体とする「植物工芸療法」(Plant Art Therapy, PART) とに分けられる。

「植物受容療法」は、植物を五感で感知する、四肢を動かして植物を収穫するなどの「狩る行為」を療法的に活用する。具体的には、観賞する、香りを嗅ぐ、肌触りを楽しむ、植物の雰囲気に親しむ、食べ物を味わう、あるいは果物や野菜の収穫などを療法的に用いる例があげられる。「植物工芸療法」は植物を用いて工芸作品 (押し花, ポプリ, 花絵, 生け花, フラワーアレンジメント) を制作する, 料理をするなどの「造る行為」を療法的に活用するものである。いずれも創作的側面が強く、いわゆる芸術的制作をする例が多いところから、芸術療法の一つとしても活用される。

2) 植物に関連する主な療法にみられる植物とのかかわり方

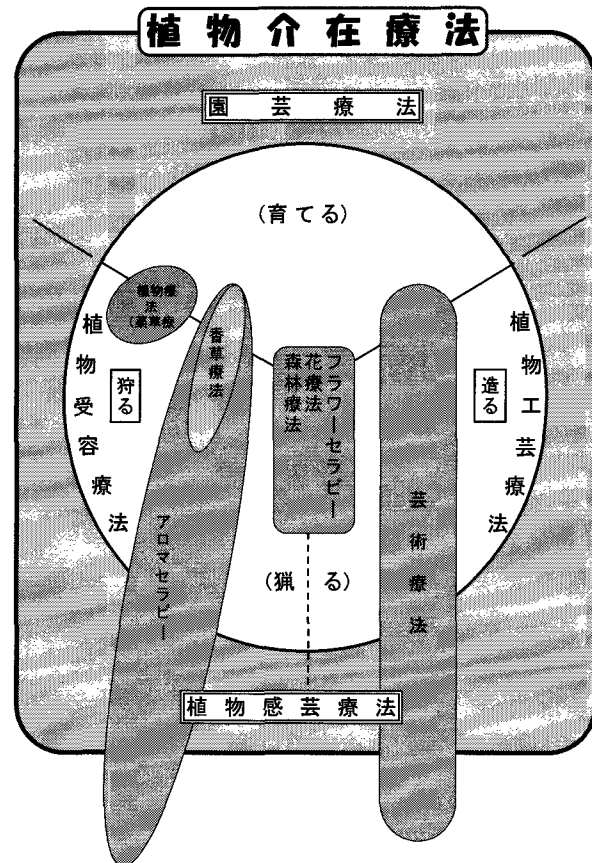
従来の療法が、上記のようなかかわり方による命名に当てはめてみるとどのように位置づけできるかを、いくつかの事例を用いて示したのが第4図である。

園芸療法は、育てることを主に療法の媒体とする、もっともよく知られた例であろう。農園芸療法、農業療法、畑作業療法、百姓療法ならびにこれに類する療法も育てるかかわりが主な媒体になるので、規模や場所の違いはあるが、園芸療法と本質的には同じとみなすことができる。したがって、園芸療法は知名度も高いこと、身近で容易にできる植物の手入れ(園芸)を媒体としていること、農業や農作業などは本質的に園芸と同じであること、さらに、あまりに用語が多くなるのは避けたいことなどを考えあわせると、上記の諸療法は園芸療法の範疇に含めて論じるべきであろう。

場所の名前を用いた療法では、どうかかわり方が主であるかによって、園芸療法の範疇に入るか、植物感芸療法に入るかが決まる。たとえば、庭療法 (ガーデン療法)、農場療法などでは、庭という場所で育てるかかわりを主に活用する場合には、「園芸療法」と呼ぶことができるし、散歩や収穫など猟るかかわりが中心であれば「植物受容療法」であるとみなすことができる。植物感芸療法的性格の強い「森林療法」では、森の雰囲気に浸る、フィトンチッドの恩恵にあずかるなど、「植物受容療法」的性格が強いが、木工を取り上げる場合もあり、これは「植物工芸療法」的側

面である。しかし、たまには植物の手入れをすることも考えられ、これが伴う場合には「園芸療法」であるともいえる。畑療法、田園療法、菜園療法なども同様にさまざまな性格を有する。

植物の種類による名前がついた療法では、どのようなかかわり方が中心となるかによって、園芸療法的でもあるし、植物感芸療法的でもある。たとえば、比較的よく出てくる植物療法 (葉草療法) は、商品としての植物を買って使用することが多い。その薬効成分の効果を期待しているわけであるが、飲用も含めて五感を通して植物とかわる場合が多い。これは狩る行為を療法的に活用するので、植物感芸療法のなかの植物受容療法ということができる。しかしながら、場合によっては、自分で栽培しながらこの産物を活用する例もある。そのときには、園芸療法という範疇に入る。



第4図. かかわり方に基づく植物介在療法の分類と従来の代表的療法の位置づけ. 松尾 (2005c) を一部改変.

「香草療法」も植物療法とほぼ似た性格を有する。ところが、これを含めたアロマセラピーの場合には、植物ではなく、合成した化学物質を用いる例もあり、その場合には植物介在療法の範疇からはみ出した療法ということになる。

「花療法」や「フラワーセラピー」の現状をみると、植物感芸療法的側面が強い。花の観賞や香りを嗅ぐなどの「植物受容療法」的な面もあれば、花を使ったアート制作など「植物工芸療法」的な面もある。しかし時には、植物を育てて用いる場面もあり、この場合には「園芸療法」とみてもよい。野菜療法、果物療法などは一般的には収穫が主な活動であり、これを活用するときには、植物感芸療法のなかでは植物受容療法にあたる。頻度は少ないかもしれないが、育てることが伴えば園芸療法とみることができる。

「芸術療法」のなかにも「植物介在療法」と呼べる場合がある。植物を用いた創作活動を療法に活かす場合である。このとき、自分で育てたものを用いるのであれば園芸療法といえるし、育てない植物を用いるときには、植物感芸療法のなかの「植物工芸療法」ということになる。しかし、芸術療法では植物ではない素材（たとえば、土、金属、絵の具や墨、楽器など）を使った創作活動を媒体とする場合も多く、合成物質を用いたアロマセラピーと同様に、これらは「植物介在療法」の枠外にある。

以上に述べたように各種の療法には、いずれも園芸療法とも呼べる側面をもっているのであるが、その場面は決して多いとはいえない。つまり、これらの療法では、園芸的（育てる）要素はごく少なく、活動の中心ではない点が共通している。大切なことはどの療法はどのような特徴をもっているかを認識したうえで、どういふねらいで、どういふかわり方を対象者に療法として適用しようとしているからどの療法を選んでいくかを明確に把握しておくことであろう。

4. 園芸療法を目指して

前節までにみてきたように園芸は、植物を育てる過程で、動物としてのヒトがもっている「子育て（そだてる）」および「手に入れる」という本能的欲求を触発し、人間として欠かせない「育てる」および「獵る」という創造的欲求を触発し充足するとともに、それらを発達させる可能性を秘めている（松尾, 2005a, c）。こういうところから、育てた植物やそれを用いた活動には格別の思いとより大きな喜びを感じることになる。この過程で癒し、喜び・愉しみを得る。これがもたらすしあわせ感が心身の機能低下を防ぎ、あるいはよりよい状態にみちびく。このような園芸の効果を療法的に活用し、対象者の福祉を推進するのが園芸療法である。この場合、療法としての手続きが欠かせない。

ところが実際には、植物を「育てる」すなわち栽培する人は少なく、植物を「獵る」人は多い。すなわち、狩る行為、あるいは、植物を用いて何かを造る行為には、多くの人が参加している。ある押し花関係者によると、押し花を楽しむ人は多いが、栽培してその素材を得るといふ人はごくわずかである。なぜであろうか。

その理由としては、1)対象である植物は成長するので、日々変化する。2)だから、いつも見ていなければならない。3)植物を育てるといふのは、自分が何かをその植物から得るのではなく、植物の成長を支援することである。しかし、4)それには時間がかかるし、5)しかも思うようには成長してくれない。6)だからこそ、いのち、あるいは生きていることを体感できる。7)とはいえ、獵る行動（狩る行為や造る行為）に比べると、育てる行動ははるかに効率が悪い。このようなわけで、8)自分のペースで物事を考えかつ進めるといふ思考様式と生活様式に慣れた現代人にはなじみにくいことなどがあげられる。

ようするに、獵る行動（狩る行為や造る行為）は誰にでも比較的容易にできるので、療法としても取り組みやすい。これに比べて育てることはむずかしいので、療法として取り組むことが少ない。もちろん、これには療法士の園芸に関する知識と技能だけでなく、対象者が園芸に取り組む心身の能力があるか否かも関係してくる。いずれにしても、育てることは、獵ることよりも複雑でかつ高度な創造的行動であるため、とかく安易な獵る行動を活用した植物感芸療法にとどまりがち傾向がみられることも否定できない。対象者の状態によることはいうまでもないが、可能なかぎり、より高度な創造的行動ができる園芸療法への指向が望まれよう。

おわりに

園芸療法への関心の高まりにつれて、その解釈は拡大され、園芸療法界に少なからぬ混乱をもたらした。これを整理する過程で園芸福祉の概念が生まれた。他方、植物に関連する療法の名称も多様化し、その数は90を超えるに至っている。また、園芸療法の現場では、植物とのかかわり方がその療法的効果にも関係することから、療法の名称を検討する機運も生まれてきた。

このような背景から、植物に関連する療法を整理し、その総称として「植物介在療法」と呼称した。この植物介在療法は、植物とのかかわり方を規準として、育てることを主に療法の媒体とする園芸療法と、育てない植物、いかえると獵ることを主な媒体とする植物感芸療法とに大別される。

植物介在療法は、植物を媒体として癒し、喜び・愉しみが得られ、それらが心身および社会的な健康（治療リハビリテーション）はいうまでもなく、機能低下

防止をも含む)につながって行く効用を活用するものである。そのなかでも園芸療法では、育てる行動と猟る行動の両者を充足することから生まれる効用が期待されるのに対して、植物感芸療法では、猟る行動による効用のみしか期待できないところに違いがある。なお、植物感芸療法は、その行為の違いによってさらに、狩る行為を主とする植物受容療法と、造る行為を主とする植物工芸療法とに分けられる。従来からの療法の多くは、植物とのかかわり方に相違があり、園芸療法的性格が強いものもあれば、植物感芸療法的性格が強いものもある。

このような療法のとらえ方は、実践とはどのようなつながりをもってくるのであろうか。「名は体を表す」とはいうが、療法は対象者のためになされるものである。したがって、植物介入療法も、対象者の状態に応じて使い分けられなければならない。つまり、実践にあたってはまず、植物に関連する療法それぞれの特徴と相互関係を明確に把握しておく必要がある。そのうえで、その概念や定義にとらわれることなく、対象者の必要性に応じた療法を選択して適用していく柔軟性が求められる。療法としては、より人間的な生き方を実感する意味で、育てることとあわせて猟ることをも体験できる活動すなわち園芸が望ましい。しかしながら、主に身体的、精神的な理由で、植物を育てることに困難を感じる市民もいる。そのような市民には、植物を猟ることによって得られる癒し、喜び・愉しみを提供して、彼らの福祉を推進すればよい。植物を媒体とした療法それぞれの本質がわかっているならば、対象者に応じた適用および活用の技術は創意工夫によって編み出せるのではなかろうか。

引用文献

- AHTA (アメリカ園芸療法協会). ホームページ. 2005. 12. 5.
- 浅野房世. 2005. 園芸療法つれづれ 8. 森の癒しから里の癒し - 植物の力を使う - . 森林文化 グリーンパワー 12月号:23.
- 広田靨子. 1992. 高齢者と体の不自由な人にやさしい園芸 - わたしの見たアメリカの“園芸療法”. NHK趣味の園芸 No.236:66-67.
- 菅 由美子. 1996. 農業・園芸の潜在威力=人を癒す. CREATIVE房総(市町村職員活性化情報誌) 37:10-15.
- 京都大学農学部. 1982. 園芸を通しての治療とリハビリテーション. 新花卉 No.113:28-29.
- Lewis, C. 1996. Green nature, human nature: The meaning of plants in our lives. University of Illinois Press, Urbana and Chicago, USA.
- 松尾英輔. 1982. アマチュア園芸論 - 身近な園芸の哲学. 私家版.
- 松尾英輔. 1991. 園芸治療 - ホルトセラピー. グリーン情報 12(5):50-51.
- 松尾英輔. 1994. 園芸療法とは. pp.30-31. フラワービジネスQ & A. 技報堂出版. 東京.
- 松尾英輔. 1998a. 園芸福祉(学)(Horticultural Welfare)の提唱. グリーン情報 19(1):61.
- 松尾英輔. 1998b・2000(増補版). 園芸療法を探る - 癒しと人間らしさを求めて -. グリーン情報. 名古屋市.
- 松尾英輔. 1998c. 園芸療法と園芸福祉. 園芸療法研究誌 1:97-111.
- 松尾英輔. 2001. 園芸療法は芸術療法ではない - 植物療法再考. グリーン情報 22(4):67.
- 松尾英輔. 2002a. 園芸療法と園芸福祉 - 植物とのかかわりで心身の癒しと健康, 生活の質の向上を目指す -. 松尾・正山(編著). 植物の不思議パワーを探る - 心身の癒しと健康を求めて -. 九州大学出版会. 福岡市.
- 松尾英輔. 2002b. 日本における園芸療法 - その発展と課題 -. pp.12-32. グリーン情報(編). 日本における園芸療法の実際 - 30の実践例を中心に -. グリーン情報. 名古屋.
- 松尾英輔. 2004a. 暮らしと園芸とのかかわり. pp.9-21. 松井 孝(編). 生活と園芸. 玉川大学出版. 東京.
- 松尾英輔. 2004b. 園芸福祉士と園芸療法士の活動はどう違うか. 農業および園芸 79(6):641-646.
- 松尾英輔. 2005a. 社会園芸学のすすめ - 環境・教育・福祉・まちづくり -. 農山漁村文化協会. 東京.
- 松尾英輔. 2005b. 「園芸福祉」の誕生と発展. 農業および園芸 80(6):3-6.
- 松尾英輔. 2005c. 園芸にみる人間らしさとは何か - 癒しと喜び -. 人間・植物関係学会雑誌 4(1・2):3-8.
- 松尾英輔. 2005d. 植物を媒体として用いる療法の位置づけ. グリーン情報 26(9):67.
- 松尾英輔. 2005e. 園芸福祉はいま - 誕生, 現状, そして, 展望 -. 園芸学研究 4(4):373-378.
- 松尾英輔. 2006a. 人と植物とのかかわりを探る(3). 植物を媒体として用いるさまざまな療法. 農業および園芸 81(1):14-18.
- 松尾英輔. 2006b. 人と植物とのかかわりを探る(4). 植物介入療法:植物にかかわるさまざまな療法とそれらの位置づけ(相互関係). 農業および園芸 81(2):233-241.
- 松尾英輔. 2006c. 植物を媒体とするさまざまな療法(1)園芸療法の特徴と植物を媒体とするさまざまな療法. 人間・植物関係学会雑誌 6(別):28-29.
- 松尾英輔. 2006d. 植物を媒体とするさまざまな療法

- (2) 植物とのかかわり方からみた分類と位置づけ. 人間・植物関係学会雑誌 6(別):30-31.
- Matsuo, E. 1992. What we may learn through horticultural activity. pp.146-148. In: D. Relf (ed.). The role of horticulture in human well-being and social development. Timber Press, Inc., OR. USA.
- Matsuo, E. 1995. Horticulture helps us to live as human beings: Providing balance and harmony in our behavior and thought and life worth living. Acta Horticulturae 391: 19-29.
- Matsuo, E. 1999. 'What is horticultural well-being' in relation to 'horticultural therapy'? pp. 174-180. In: M.D. Burchett, J. Tarran and R.A. Wood (eds.). Towards a New Millennium in People-Plant Relationships. University of Technology, Sydney, Printing Services. Australia.
- 日本園芸療法研究会. 1995. 園芸療法. 日本園芸療法研究会. 東京.
- 日本緑化センター. 1992. ホーティカルチュラル・セラピー (園芸療法) 現状調査報告書. 日本緑化センター. 東京.
- 野田正彰. 1997. 植物のやさしい語りが生命を充実させる 精神がやすらぐ園芸療法. RONZA (論座) No.24:60-67.
- 大阪園芸療法研究会. 1996. 園芸療法についての報告書 (平成7年度).
- 佐々木勇乃進. 1987. 分裂病患者のためのケアーわが体験をもとに. 精神科選書 15. 診療新社. 大阪.
- 澤田みどり. 1992. 園芸療法 - ホーティセラピー (上). 園芸新知識 47(11):9-14.
- 澤田みどり. 1993. 園芸療法 (ホーティセラピー). 月刊福祉 76(9):106-107.
- 澤田みどり. 1995. 自然の力でリフレッシュ園芸療法. ベルビ 87:24-26.
- 高野牧人. 1995. 神戸光生園の園芸療法. グリーン・エージ 22(2):No.254:32-35.
- 時実利彦. 1974. 人間であること. 岩波新書. 岩波書店. 東京.
- 塚本洋太郎. 1978. 園芸の時代. NHKブックス. 日本放送出版協会. 東京.
- ヴァイス, R.F. (山岸訳). 1995. 植物療法. 八坂書房. 東京.